

特集にあたって

松井 知己 (東京工業大学)

明けましておめでとうございます。2015 年は、機関誌も第 60 巻となりおめでたい限りです。栄えあるその第一号では、学会を牽引されてきた大学関係の方々に、昔話から、未来へのビジョン、次世代への激励の言葉等を自由に書いていただきました。

まず最初は、2008～2009 年度に会長を務められた伏見正則先生より『OR ランダムウォーク』と題する原稿をいただきました。「私の学生時代は手回し計算機でね」と語って下さった伏見先生。本当に様々な研究をされていることに驚きます。また日本 OR 学会がアジアの中で連携を作っていくのに尽力された過程も初めて知ることができました。伏見先生の軽妙洒脱な文章によるランダムウォーク(酔歩)をお楽しみ下さい。

次は、2004～2005 年度に会長を務められた今野浩先生より『OR50 年』の原稿をいただきました。以前の連載『OR40 年』の記憶がまだ新しいのに、『OR50 年』版の登場です。今回の原稿では、近藤賞の創設、「理工学(金融工学)」分野の立ち上げ、ポートフォリオ理論と信用リスク計量問題の御研究について、当時の様子を書いて下さいました。工学部の語り部を自任される今野先生の研究への真摯な姿勢と、辛口の文章をご堪能下さい。

三人目は、2007 年に第一回近藤賞を受賞された茨木俊秀先生より、『P と NP の半世紀』と題する原稿をいただきました。「NP-完全」という単語に、たった半世紀の歴史しかないことに改めて驚くと同時に、新たな単語や概念の出現した当時の混乱や模索の様子を茨木先生の原稿から窺うことができました。最初にいただいた原稿は、将来ビジョンを見据えた格調高いものだったのですが、松井が無理にお願いして「先生の周囲数メートルで当時起きたこと」も加筆していただきました。「Edmonds の論文は読み難くなかったですか?」という不躰な問い合わせにも、快く応じて下さった茨木先生に改めて感謝いたします。

次は、前会長の腰塚武志先生より『積分幾何学との出会い』と題する原稿をいただきました。積分幾何学との出会いから、Santaló 教授の著書の購入、プエノスアイレスで著者と実際に出会うまでのドラマのようなお話は、インターネットの存在に慣れた今からは想

像できない苦勞があったことが想像できます。この腰塚先生の原稿には伏見先生が、先の伏見先生の原稿には腰塚先生が出現するあたり、突き合わせて読むと両眼立体視のように当時の状況が浮かびます。是非お試しあれ。

2011 年に第三回近藤賞を受賞された宮沢政清先生からは『待ち行列と私の研究—理論研究の可能性—』と題する原稿をいただきました。宮沢先生の近藤賞受賞講演は、2011 年春季発表会に予定されていましたが、東日本大震災のため学会そのものが中止されてしまいました。その後、待ち行列研究部会として近藤賞受賞記念シンポジウムが開催されましたが、聞き逃してしまった方も多いのではないでしょうか。今回の原稿では、宮沢先生の研究の原点から未来のビジョンまで丁寧に書いていただき、門外漢の私でも何かわかったような気がします。冷静沈着で、しかも情熱に溢れる宮沢先生の発表が思い浮かぶ記事をお楽しみ下さい。

第二回近藤賞(2009 年)を受賞された小島政和先生からは『大域的最適化が面白い—Lagrange 緩和から Putinar の補題へ—』と題する原稿をいただきました。自分の指導教官である小島先生の前書きは書き難いのですが、東工大を離れられてから、ますます論文執筆スピードが上がっているという噂にたがわぬ、最新の研究とこれからの大きなビジョンの熱気に圧倒されてしまいました。

最後は、2013 年に第四回近藤賞を受賞された藤重悟先生より『「運・鈍・感」で綴る若手研究者へのメッセージ』と題する原稿をいただきました。研究発表の際は、厳格なスタイルを堅持されている藤重先生ですが、今回の原稿では、昔の思い出や、研究への思い、世界的な活躍の裏話など楽しいお話をいただきました。研究に行き詰まった時にどうするかなど、若い研究者への具体的なメッセージに先生の優しい眼差しを感じます。

今回お願いした方々は、皆さんご存知のように筆の立つ方ばかりですので、読んで新年を楽しく迎えられる特集となりました。最後に、本特集実現にご尽力いただいた小林隆史先生(東工大)に深く感謝いたします。

では、お楽しみあれ。